

小説・江戸神仏歳時記 (15)

神田明神



郡 順 史

神田明神というのは通称であって、正式には神田神社という。だが、我々江戸（東京）育ちの者は、神田明神とよんだほうがびつたりくるので、ここでも明神さんと呼ばせていただく。

さて、神田明神は、赤坂の山王日枝神社とともに、大昔から江戸ならびに江戸っ子の総守護神として崇められ、且つ親しまれてきた。

共に御創建が古く、御利益も篤かったせいもあるのだろうが、何といても徳川家康が天正十八年（一五九〇）江戸入りし、幕府を開いたのが江戸と江戸っ子の発展に寄与したといえる。

この時、両神社とも、家康の開府を歓迎して大御輿を繰り出した。その時の情景がある書では、「豪華絢爛、勇壮にしておのずから心氣わき立つが如し」と書いているが、とにかく素適もなく華か且つ勇ましいものであったのだろう。

その話を耳にした家康は、見物したくなったのである。「城へ入れよ」と命じた。城と言っても江戸城はまだ完成途中であったが、その中を「わっしよい、わっしよい」と掛声も勇ましく派手派手しく練り込んだ。

これが家康の氣に入り、以降この二者に限り御輿が江戸城へ入るのが通例になった。

これを入るは天下祭りとよんだ。従って祭りに

「天下」が付くのは、江戸、いや日本諸國広しといえど、神田明神と山王日枝神社のみなのである。

因に江戸三大祭りという言葉がある。神田明神と山王日枝神社の二つと、あと一つは、深川八幡の祭り、浅草の三社さま、千駄木町の根津権現神社、芝の大神宮（鳶と角力取りの喧嘩で有名、この神社も古い）、あるいは亀戸天神と、おそらく土地の人々が身びいきで自分の所の神社を加えたがった結果であろうが、しかしこういうものは、他人さまがひとりでの評価できめてゆくもので、勝手氣局無理矢理作りあげたり強制したりして決めるものではないのではないか。従って強引に三大祭りとして、三大にこだわることはない、二つで結構と思うが如何であろうか。

それはさておき、神田明神のご祭神は、おみかみ大己貴命（大黒さま）とすけのみこと少彦名命（えびすさま）それにかみ平将門命の御三神となっている。前の二神は福徳、つまり家庭円満、商売繁昌の神さまで平将門神は制火、賊排除、すなわち火事を起こさず火を制し、賊襲い来たら武力で排除してくれる神さまである。

もつとも一説によると、神田明神が今の湯島お茶の水台に鎮座なされるようになったのは、慶長八年（一六〇三）徳川家康が江戸に幕府を開くと同時に江戸城ならびに城下町としての江戸の整備にとりかかった。

その節、江戸城内に取込まれるべき大手町に在った平将門塚及び神社を、家康の命令で現今の地にうつした。同時にちょうどこの地が江戸城の鬼門にあたるので、江戸の護り、総鎮守社として庇護した。

以来、将門人氣もあり、江戸っ子に好かれて発展に発展をとげ、氏子も、神田、日本橋、秋葉原、大手町、丸の内、築地など一〇八ヶ町会に及び、その祭りも山王日枝神社と共に江戸を二分する勢いとなって今日に至っている。

もつとも神田明神が、江戸っ子自慢の名所になったのは、眺望のよさも忘れてはなるまい。今でこそ高層ビルが立ちならび、視界もよくなかったが、江戸時代は、四方八方、江戸中が見廻せ、江戸湾に泛ぶ白帆さえ見えたという話である。それゆえ氏子たちは、「神田明神さんにお参りして江戸を見なければ本当の江戸見物をしたとはいえねえ」と威張り、江戸見物に地方から来た人は、必ずといってよいほど明神さんにお参りし、四方を眺めて、「ああお江戸は広い」と感心し満足したものだといふ。

しからは庶民の究極の願いであるご利益を明神さんはお与え下さったのであろうか。むろん伝説、言い伝えだが、その二つ三つをみてみよう。

庶民の願いは、いつの時代もそう突飛なものでない、まず第一が、家族の健康、安寧であり、ちよつと欲を張つて、商売繁昌、病氣を持つと当病完治して戴くこと、更には縁結び、夢願望の成就など、それぞれ数えきれないほど数多くある。もつともどこの神さまにもお願いすることであらう。

しからば神田の明神さんは、参拝しお願いするとどんなご利益があったか？

まずは大己貴命から書いてみよう。
大己貴命は通称を大黒さま、白兔の神話でも知られるように、情があり生きとし生くるものすべてに優しい。その上に薬草、つまり病氣をなおす術も心得ていらつしやる。

従つて一病完治をお願いするときと治して下さるといふ。が、それ以上に意外なのは、落とし物、失せ物を探し出して、もとに戻して下さるといふ。

ある時、神田岩本町の大工見習いの若い者で三次郎というのが、四代前のお爺ちゃんから伝わるキセルを失ってしまった。

本人はタバコを喫まないのだが、このキセルをいつも身につけていると、大難が小難ですむと言ひ伝えられ、大切に身につけていたのである。

それを落したのか、どこかに置き忘れたのか、無くしてしまったのだ。

「どうしよう、どうしよう。あれを無くしたらご先祖さまに申しわけない」

知り人ぜんぶに嘆きをうったえた。

すると親方の彼の二つ年下の娘キヨが、

「だったら神田明神さんにお願ひするといいわ。兔のお守りがあつて、願掛けして持ち歩いていると、きつと戻してくれるて」

と教えてくれた。三次郎は藁をもつかむ思いで明神社に飛んで行き、お願ひしてからその兔のお守りというのを戴き、身につけた。身につけただけではない、一日に何回も取り出しては、ひたひたに押しいただき、「どうぞキセルを出して下さい」とお願ひした。

だが、二日たち三日たつてもキセルは出てこない。

「キヨちゃん、いくらお願ひしてもキセル出て来ないぜ」

三次郎は泣きべそ半分、腹立ち半分でキヨに訴えた。

「バカね。いくら神さまだつて、そんなすぐに出してくれるわけないでしょう。もつと一生懸命お願ひして、十日くらい待ちなさいよ」

逆にお説教されました。

それから五日後、ついにキセルは出た。

その朝、いつものように長屋の端にある井戸へ顔を洗いに行くと、その井戸端のかたわらの泥の中に埋もれて吸口だけをちょこっと見せていたのである。

多分、顔を洗う時落し、気がつかず、そのまま水氣の多い泥の中に埋もれさせてしまったのであろう。

天にも昇る氣持ちで掘り出した三次郎は、ぴかぴかに磨いてからキヨの所へ飛んで行った。一番心配してくれたのはキヨなので、真先きに知らせようと思つたのだ。

「それはよかつたわね。すぐお禮参りに行きなさい。実はあたし黙っていたけど、あたしも明神さんにお願ひしていたの」

キヨもよろこんでくれて、懐から兎のお守りを出して見せた。

これがきっかけになって、二人は愛し合うようになり結婚したそうである。メデタシ、メデタシ。

次に少彦名命すくひなのみこと。この神様、境内の一隅に大波の中、お椀に乗って立つておられる像が安置されており、ちよつと一寸法師と見まうが、歴とした神様のお子の神さまであり、本来は大國主命と協力して國土の経営にたずさわる神様であるという。

だが此処では、開運と縁結びの神様として尊奉され、これまたお願ひをする参拝者が絶えない。

それというのも、この神様の縁結びというのは

恋愛結婚といった男女間だけの縁を結ぶのではなく、ありとあらゆる人間同士の、たとえば親子とか兄弟きょうだ、友人間の縁や出合いをつかさどり、昨日まで知らない同士でも、この神様にお願ひするとたちまち百年の知己の如く親しくなれるという。それゆえか、何かの寄り合いがある。紛糾している相談会にのぞむ、という人々は必ずといってよいほど会合前に神社にお参りし、この神様に丁寧に掌をあわせてお願ひしてゆくのだ。

人間関係が、殊に初対面の人との、あいだが円滑にゆくというのは、商売人同士とか利害関係にある人にとってはこよなく嬉しい事であり、商売繁昌のもとともなるのではなからうか。どこのか団体だんたいが、人類皆同じ人間手を結び合おう、と叫ぶのも結構だが、その叫ぶ前にこの神様に両掌を合わせるほうがもっと大事ではないか、と感想を抱いた。

三

さて最後になったが、平将門の神。

神田明神さんが今日まで何千何百年、徳川時代だけでも三百年、明治、大正、昭和、平成を加えると四百年と信者を集め、崇敬が耐えないのは、この神社に平将門が祀られているから、と言つても言いすぎではないように思う。

とにかく何故か不思議に将門さんは、江戸っ子以前の江戸人、そして江戸っ子、いや関東一円の人々と言ってよいかも知らない。人々に人気があり好かれている。

ある人は、将門は京都政治の搾取に対抗して民衆を助けてくれ、最後には討たれて京都で打首になったが、その首がはるか江戸まで飛んで帰って来てなおも睨みをきかせてくれたからだ、と言っている。

では、将門公は、神田明神社に祀られてから、どんなご利益をお参りする人々に与えて下さったのであろうか。

強盗、盗賊よけ、刃物による難よけ、は当然としても、意外なのは火の災難を予防排除してくださるというのだ。

江戸時代の初期には戦國の余風からか、辻斬りとか押込み強盗とかが横行し、斬られて命を落す人もあまたいた。その災難を除けようと、将門公の守り札を家に貼ったり身につけるのが流行した。そして事実お札のおかげで剣難からのがれた、という話が伝わっている。

が、時代が下るにつれ、人口も増え人家も立てこんでくると、火災がふえた。そこで剣難より火難よけをお願いするようになったのではないか。この方のご利益ばなしもいくつか伝説として語り伝えられている。

以上のご利益のほかに、この神社には歴史的に一見より百見するほどの価値のある建造物（失禮）がある。

まず神社の看板ともいへき「随神門」である。総絵の入母屋造りで、左右に随神像が安置されている。今どき入母屋造りの建築は珍しいし忘れられている。とくと拝見して「ああこれが入母屋造りというのか」と歴史的建造物をあらためて観る参考になる。

そしてその奥にある御社殿。これも堂々というより立派である。総漆朱塗でいかにも神々がおいになる、と思わせる。

その他、この神社の境内には種々の神さまがお祀りされているが、その中でもっともユニークなのは「銭形平次とその仔分の八五郎」の碑があることである。

この碑は昭和四十五年、当時時代小説家の集りで「捕物作家クラブ」というのがあり、会長は銭形平次の捕物帖で有名な野村胡堂、副会長が桃太郎侍の山手樹一郎であった。当時、捕物小説が盛んで、芝居、映画、テレビとモテモテであった。そこで何か記念になるものを残そうという話が出て、銭形平次の住居が神田明神下の長屋に住んでいることになったから、神田明神境内がよいだろう、となって建立されたという。

今では「銭形平次」も忘れられつつある人物に

なったが、それでもときに発見した人が、「やあこんな所に銭形平次の碑がある」となつかしそうに見てゆくと言う。

もう一つ大事なものを忘れていた。それは資料館の存在である。

社殿に向って左側に資料館があり、江戸時代の参考物件が陳列されている。そう資料的に大量というわけでもないし、何でもあるというわけでもない。しかし丹念に観て行くと、おのずから江戸の文化、風俗習慣などが理解出来、非常に有効性があり、江戸に触れたいという初心の方々の手引きとしては便利だと思う。それに神田祭りの歴史的資料も展示されているので、知識を増すことが出来る。

もう一つ忘れていました。

この神社には、参拝するのに女坂、男坂というのが有る。拜殿の裏側の左右に別れて、むろん女坂はゆるやかで男坂はやや急となっている。名はそうであっても、必ずしも男は女坂を、女は男坂を登ってはいけない、というわけではない。

むしろ、行きは女坂を登り、戻りは男坂を下る、あるいはその反対の坂を利用すると、好いた人と縁が結ばれる、と言って、わざとそう登り下りする参詣人もいるというが、神社の人に尋ねたら、「そんなことは有りませんよ」

とわらわれた。しかしもしかしたら――。

最後に、神社へ行く道順を記さねばならないだろう。

神田明神さんへの道は、いくつも有る。はじめての人には、もっとも解りやすく近しい道は、JRのお茶の水駅の「聖橋ひしりばし口」を降りてすぐの左へ五、六歩。聖橋があり、右手に湯島聖堂を見て渡り進むと本郷通りへ出る。それを渡って右へ行くとすぐに左手に神田明神が見える。距離にして三百米くらいか、時間は十分とかならない。

他にも種々行く道はあるが、この道が一番早くて便利かと思う。

どうぞあせらずゆっくりお参りして、たっぷりご利益をいただいで下さい。

住所 〒一〇一〇〇二一

東京都千代田区外神田二一六一二

TEL 〇三―三二五四―〇七五三

神田明神

― 次回は赤坂山王日枝神社 ―

■訂正とお詫び

酒林第七十三号に誤植がありました。
左記の通り正誤表を記載させて頂きます。

	正誤表	
誤り		正
二十七頁二段十七行目 「ここ二、三年の間で」		「ここ二、三十年の間で」

■屋根のある橋（表紙説明）

屋根のある橋を探す写真家と橋の近くに住む主婦のたった四日間の恋。映画「マディソン郡の橋」のヒットにより、日本でも屋根のある橋が脚光をあびた。愛媛県内子町や旧河辺村に残る屋根つき橋も地域の人々によって大切に保存され、そこを訪れる人を迎え入れている。

「酒林」随筆特集 第七十四号
平成十九年十一月一日号
発行人 西野 信也
印刷人 太陽印刷株式会社
高松市亀井町二番地八
発行所 西野金陵株式会社

万一乱丁・落丁がありましたら、「一報下さい」。